



平成8年の田島ヶ原のサクラソウ自生地

白いサクラソウ (磯田洋二氏撮影)

## 信州さくらそうの思い出

数年前同好の会員の方々と、信州を旅した時の事である。大町市の山中で「さくらそうの自生地を一人で守っている老人が居る」との地元の方の案内で、尋ねる事になった。その場所は人里離れた山奥で、道路から沢伝いに入り、砂防ダムや巨石が道を塞いだりして林の中へ入った沢の所であったが、周囲は鉄線や丸太で人が入れないようになっていて、堀立小屋の白髪の老人がその人であった。飲物迄用意して待つて居た老人は、笑顔で次のように話してくれた。この辺の沢には沢山のさくらそうが自生していたが、開発や土砂災害を守ると言う理由で砂防ダムが幾つも作られ、さくらそうは全滅するところだった。一人反対運動をしたが認められず、止むなくさくらそうをこの小さな自生地へ移したが、この花も持って行かれる始末で、花の頃は1人で泊って守っているのだと云う。命を救われたさくらそうは色あざやかに咲き誇り、私達を歓迎し喜ばしてくれた。老人は命のある限りこの花を守り続けると云い、花

## 吉岡義雄

を鑑賞し栽培するだけの私達はその気骨に頭が下る思いであった。

今、浦和のさくらそうは特別天然記念物として保護され、年々株数は増加していると言う。しかし、荒川の左岸は、戸田・道満・田島ヶ原・土合・大久保・錦ヶ原と一面にあった事を覚えている。ポートレース場、公園、体育施設と両隣の自生地は近代化の前に消滅している。さくらそうに限らず、野生のものは自然の環境の中で生かしてやるのが一番良い事ではあるが、難しい事も良くわかっている。

しかし、過保護にならないよう生かしてやりたいものである。

信州であの老人が子孫を増やしてくれと云って皆にくれた1株の花は、今年も徐々に増えて元気に咲いてくれた。そして、増えたさくらそうを古郷の信州へ沢山帰してやりたいと思っている。その時迄、あの老人やさくらそうには元気でいて欲しいと願うものである。  
 (埼玉さくらそう会会員)



## 田島ヶ原のサクラソウと昆虫の不思議 (1)

磯田 洋二

第2次世界大戦が終り、世の中が落ち着いてくると、いろいろな文化活動が盛んになりました。

そんな時、浦和市内の小・中・高の生徒や先生、大学生や一般の方々が参加して、「浦和生物同好会」が結成されました。会の顧問や指導者には、須甲鉄也先生や江森貫一先生など、当時の埼玉大学の先生方が参加され、親しく指導してくださいました。そして、観察や採集、講演、研究発表などの催しには、いつも大勢がつめかけて、それは盛会でした。観察や採集には遠出もしましたが、近場の秋が瀬や見沼には度々出かけました。

当時の秋が瀬は、なだらかな起伏が続き、低い所には小川や沼の点在する湿地が広がり、ハンノキ林やクロチク林がこれを取り巻き、やや高い所にはクヌギ、エノキ、ムクノキ、ケヤキなどの雑木林が連なっていました。堤防に沿った所は立派な田圃や畑になっていましたが、秋が瀬一帯には虫食いのように食料増産のための開墾地が広がっていました。つまり、人手がかなり加わっていましたが、まだ手付かずの自然が沢山残っていたのです。

さて、春の観察と採集の会が秋が瀬で行われたとき、満開のサクラソウを前にして、江森先生が「サクラソウには、雌しべの先が雄しべより高いところにある花と、雌しべの先が雄しべより低い所にある花があります。一つの植物でどうして二通りの花があるのか」と、皆さんも知っている進化論のダーウィン先生によるたとえ、昆虫が蜜を求めてやってきたときに花粉を運んでもらい、異なったつくりの花で受粉する仕組みになっているといっています。サクラソウの花を採って縦に裂いて見てみると、花

のつくりが解りますから、皆さんも見て考えてください。また、どのような昆虫が蜜を求めてやってくるのかということは、まだ誰にも解っていないので、ぜひ皆さんで調べて見てください。」というお話がありました。蜜を求めてやってくる昆虫なら、チョウ・ミツバチ・ハナアブの仲間ではないかと、一面に咲いているサクラソウの群落の間を熱心に探し歩いたものですが、そのような昆虫は見当りませんでした。チョウの仲間のモンシロチョウ・スジグロシロチョウ・モンキチョウ・ツマキチョウ・キタテハ・ギンイチモンジセセリが、サクラソウの群落の上を横切って飛ぶのは観察できたのですが、ほとんどの個体は素通りしただけでした。スジグロシロチョウ・ツマキチョウ・キタテハの中には、花にとまった個体もありましたが、熱心に蜜を吸い求めている個体はありませんでした。ミツバチやハナアブの仲間には、飛び交うものも見られませんでした。

やがて、サクラソウの花粉を運ぶ昆虫について、秋が瀬では、(1) サクラソウの花粉を運ぶ昆虫がいるならば、その昆虫は何か。(2) 秋が瀬には多くの昆虫が見られるのに、サクラソウの咲く頃に少ないのはなぜか。(3) 秋が瀬にサクラソウの花粉を運ぶ昆虫がいないとすれば、たくさんの種子が実るのはなぜかという、3つの疑問を解決しなければならないということになりました。そして、多くの人々が秋が瀬を尋ねて、観察や調査をしましたが、その後も、謎解きは出来ていません。しかし、謎は少しずつ解け始め、また、あらたな謎が生まれています。この謎については次号で詳しく述べたいと思います。

(浦和市文化財保護審議会委員)

## サクラソウ関係図書紹介 (1)

ここでは、内外で発行されたサクラソウに関するあらゆる図書を逐次紹介していくことにする。単行本はもちろん、雑誌等に掲載された学術論文から随筆や紀行文に至るまで、すべてを含める考えである。なお、文中、敬称を略したところがある。また、その図書の所蔵場所が公的なものは、それを示しておくことにする。

### 野生のサクラソウ ガーデンライフ・東京山草会共編

誠文堂新光社 昭和52年 A5判 317ページ 上製本

およそサクラソウについて、知りたいことがすべて記されていると考えられる図書である。まず「日本のサクラソウの分布」と題して井上健氏の論文がある。サクラソウ属の分布やユキワリソウなど個々の種の日本での分布まで図示しており、続いて1ページの記事で、小解説や意見などが載せられている。以下、同様なかたちで、「日本のサクラソウの種類」(井上健)、「日本のサクラソウの仲間の生態」(斎藤常夫)、「サクラソウ類の作り方」(六城雅彙)、「サクラソウの交配」(同)、「サクラソウ作り五つのポイント」(大垣晃一)、「夏の越しかたと二期栽培」(小田倉正樹)、「自生地に学ぶユキワリソウの仲間」(高橋幹男)、「サクラソウの育種」(大垣晃一)、「東部ヒマラヤ・ブータンにサクラソウを訪ねて」(山崎敬)、「外国産のサクラソウ」(萩原純一)、「各地におけるサクラソウ類の作りかた」

(中田守ほか)、「私のサクラソウ栽培」(斎藤常夫ほか)、「サクラソウの仲間 文化史」(大垣晃一)、「日本サクラソウ研究史」(井上健)、「礼文島の思い出」(高橋幹男)、「サクラソウ撮影旅行——自生地への案内」(富田幹夫)と続いている。口絵に91葉のカラー写真が掲載されている。

さくらそう

鳥居恒夫著

日本テレビ 昭和60年 B5判 151ページ 上製本

「はじめに」で、「現有品種の3分の2に当たる205品種を収録した大図譜が初めて実現することになりました」とあるように、各品種が美しいカラー写真で紹介され、花柱形、標準花径、花形、花容、花色、作出年代、類似品種を記し、特徴を述べている。全体構成は「サクラソウの園芸品種」、「サクラソウの野生品と自生地」、「サクラソウ培養の歴史、サクラソウ品種の特色と分類、サクラソウの育て方」が大きな柱となっている。著者の鳥居氏は、刊行時、東京都神代植物公園に勤務しており、以後も都内の植物園関係の公務にあたっているが、一方、さくらそう会の事務局設立以来、担当している。自宅でも2000鉢にも及ぶサクラソウを育てている。

(所蔵：浦和市天然記念物調査会)

田島ヶ原サクラソウ自生地  
成育状況調査結果

今年の調査は4月18日、19日に実施し、その結果は、次のとおりでした。

1. 10m四方(1アール)の平均株数は2,799株で、昭和40年からの調査開始以来5番目に多い。
2. 前年比5.8パーセント増、昭和40年比13.1パーセント増となる。
3. 株数は、推定では全体で100万株程度と見られる。
4. 成育株数に対する開花株数の比は、24.4パーセントで、これも前年に比べ多くなっている。

自生地の焼き払い

田島ヶ原のサクラソウ自生地では、その維持管理の一環として冬期に自生地を覆う枯草の焼き払いを実施しています。この写真は平成8年1月31日の様子ですが、今年も1月末に予定しています。



ヘルドさんの手紙

ポール・ヘルド氏 (Mr. Paul Held)

アメリカ サクラソウ協会会長。コネチカット州在住。1996年4月に来日、浦和市内に滞在し、サクラソウ自生地を観察したほか、浦和市をはじめ各地のサクラソウ展示会を見学。関係者との意見交換会などを行った。浦和市では、さくらそう展の表彰式に参列し、あいさつをした(写真)ほか、埼玉さくらそう会の幹部らとの意見交換会をもった。

今号より2号にわたって、ヘルド氏からよせられた浦和訪問記をご紹介します。

浦和の印象

浦和市での滞在を振り返ると、楽しい思い出が浮かんできます。しかしながら、同時に、私が住んでいる町の環境と人々の態度とを、浦和市のそれと比べてしまいます。浦和市の第一印象は、誰もがなんて開放的で友好的なのだろう、というものです。誰もがすべての人に敬意を払います。階級を意識した態度、すなわち、私の方があなたより偉い、または、私の地位の方が上だ、下だ、という態度は存在しないようです。まるで家族、それも大家族の一員であ

るかのように、誰もがすべての人のために働いているように思えます。

もちろん、福祉や市民の幸せ、市の外れにある川の土手に咲く小さな花にまで、欠かせないことを、浦和市の行政が効率的に計画し、実行していることにも感銘を受けました。市長、教育長及びすべての市職員が一体となって、浦和市を素敵な街、素敵な人々の暮らす街、そしてそこに暮らす人々が街に抱く願い、自分たちのための街であって欲しいという願い



を満たしてくれる街、そんな街を築くために働いておられます。多くの人々による、このような幸福な協調作業を見ることができたのは、素晴らしいことです。

すべての人々がすべての人々に対して抱く尊敬の念に習い、私も、皆様方のお一人お一人がなさっている素晴らしい仕事に、頭を下げたいと思います。ぜひ見たいと願っていた野生のプリムローズと、専門の栽培者に育てられたプリムローズとを見ることができました。私が素敵な経験ばかり味わえるように計ってくださる方と出会えたのです、実際その通



「サクラソウ展表彰式であいさつをするヘルドさん」

りの経験が出来ました。これには、愛情と気遣いと計画と敬意が必要です。私の滞在をこれほどまでに素晴らしい経験になるよう力を尽くしてくれたすべての方々、お一人お一人に感謝します。素晴らしい経験でした。

野生のプリムローズ、田島ヶ原のサクラソウの保護、保存について、今後もその責任をお引き受けくださることを、浦和市の皆様にお願ひしたいと思います。子どもたちに、自然が備える美しさと貴重さを愛し、理解するよう教えてくださるようお願いいたします。そしてまた、古い歴史を持つサクラソウであるからこそ、保存するだけでなく、伝統を支え、守るとともに、新たな品種を作り出すこともお続けくださるようお願いいたします。

埼玉さくらそう会の指導者たちとの夕食の席でも申しましたとおり、私はサクラソウの花を見るためにこの地を訪れました。しかし帰国する私の胸の中は、浦和の人々から受けた感銘で一杯だったのです。

Paul Held

(訳 K.Megumi)

## サクラソウ学習成果

国語の教科書で田島ヶ原サクラソウについて学習した、滋賀県長浜市立神照小学校4年生は、全学年が班ごとにその成果を冊子にまとめて発表した。同校4年生の担任の一色寛子教諭を通じて、その成果が一括して浦和市教育委員会に送られてきた。各班とも工夫した冊子にまとめ、図を入れ説明を加えており、児童なりの感想が述べられている。真剣に取り組んだ姿がうかがわれる。記されていた意見・感想のうち、いくつかを紹介する。

○これからも、さくらそうをまもって下さい。そしてさくらそうを大切にして下さい。けれどもさくらそうだけを大切に守っていてもだめですから、さくらそうもほかの自然も大切にしてください。

○私たちは、この勉強をして花や虫たちを大切にすることがよくわかりました。

○自然ぜんたいをまもったらサクラソウもまもれると思いました。サクラソウをまもるのはむずかしいけどがんばってください。

○自分たちでできること。紙のむだづかいはいらない。ゴミを捨てない。川をよごさない。

○ちょっとしたことでぜんをまもれるんだ。

## —— 滋賀県長浜市立神照小学校4年生の発表 ——



さくらそう通信

平成9年1月10日

編集・発行 浦和市教育委員会

浦和市常盤6-4-4

☎048-829-1796

印刷 関東図書株式会社



題字 教育長 浅見 匡